Close up 【被災地レポート】 2011.3.11

復興支援 宮城県女川町
かまぼこ会社 インターン体験記

宮城県牡鹿郡女川町にある、かまぼこ製造会社『高政』で、復興大学（別稿参照）が主催するプログラム「復興支援インターン（就業体験）」に参加した。大学2年、夏休みの出来事だ。

学生記者　中村亮士（商学部2年）

初日は石巻市や女川町を見て回り、2日目～5日目までが企業でのインターン。最終日は報告会。他大学の学生を含めた参加者全員で、それぞれの企業を訪問した内容、感想を発表する。

お世話になった高政は、1937（昭和12）年に創業された女川町随一の企業である。東日本大震災で、町は地震と津波により壊滅的な被害を受けた。被害を最小限度に食い止めた同社は、震災直後から町の司令塔としての役割を果たした。

インターンでは、復興を目指す高橋正典社長や多くの社員に、町や会社への思いを詳しく聞かせていただいた。実際の作業の体験、工場内の見学、魚市場へも同行させてもらった。忙しい最中、時間を割いてくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいだ。

印象に強く残ったのは、高政が地域貢献を重視していることである。購入した放射能測定器を周辺企業に貸し出し、震災直後は避難所にかまぼこを毎日届けた。

「目先の利益ばかりを見ていると足元をすくわれる」「私たちは女川町に生かされている」という言葉を重く受け止めた。

企業が永続するために必要なのは、利益だけではないと学んだ。

●

大学内での、このインターンに関する報告会でのこと。説明すべきことが抜けていたり、言いたいことが言葉で表現できなかったり、納得できる内容ではなかった。私の反省点である。

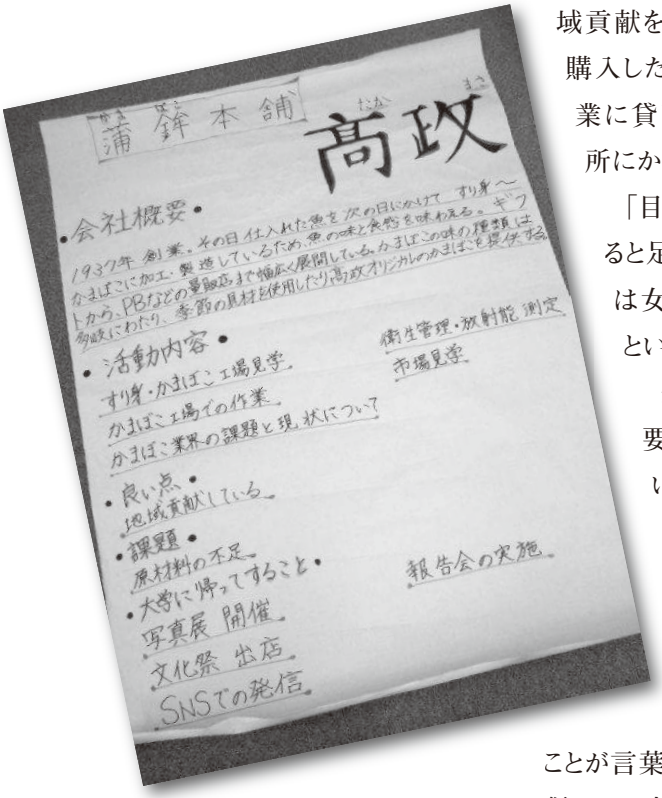
人前で発表する、伝えることは容易ではない。現地で学んだことを整理して発信できなければ意味がないことを痛感した。

今回学んだことを自分の糧とし、反省すべき点は反省して、私自身の成長につなげていきたい。

そもそもインターンシップとは、端的に言えば「就業体験」である。では「働く」とはどういうことか。高橋社長が話してくださった。

「働くことは喜びに繋がる。つまらないと思って仕事をしても感動は生まれない」

数年後、私は社会に出て働く。仕事を面白いと思い、感動を生み出せる社会人を目指したい。



インターン最終日の報告会で使用した模造紙

■復興大学

人材育成、市民生活の質の向上、地域の発展などを目的とし、加盟する大学間や大学と市民・企業・行政などと連携した取り組みを推進する機関。学都仙台コンソーシアム（協会、連合）と呼ぶ。被災地の高等教育機関や県内の自治体などと協力して、地域に貢献できる人材を育成することで、大震災からの復興に寄与する。